

平成十八年五月一日発行 第十六巻第五号 通巻第一七九号 毎月一回一日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成18年5月号



あぶな絵

高橋将夫

野火走り何事もなき日なりけり  
これからが忙しくなる春の山  
山笑ひ海は歌つてをりにけり  
一隅を守つてゐたる種案山子

どうしてもそよぎたくない柳かな  
恋猫と呼び名変はりしペルシャ猫  
これくらいと子に見せられし土筆かな  
蓮如忌の飛ばずにゐたる子持鯨  
あぶな絵の腓に風の光かな  
闇穴に満ちてきたりし春の潮  
密院のまぶしさにあり春の水

# 子午線

寺田すず江

鳩の羽落ちてをりけり冴返る  
涅槃雪限りなく湯の溢れけり  
露の臺ひなた日影の土匂ふ  
子午線の光を運ぶ潮招き  
舩の海色濃くなりぬ涅槃西風  
縁側に届く潮の香つるし雛  
啓蟄の歩幅大きくなりけり  
春一番風紋消えてしまひけり  
潮鳴りの夢追ふてゐる月日貝  
芽吹く山ゆるがしてゐる魑魅かな

## 特別作品

風車かすかな風も見逃さず  
黄沙降る羽をたたみし孔雀かな  
烏雲に入り上げ潮のひたひたと  
また同じところに出でし蝮の道  
パンドラの箱おかれぬて亀の鳴く  
艸の音の遠ざかりゆく椿山  
荃立や大風呂敷をひろげぬる  
埋没林現れし川面や草青む  
経筒のかけら大小風光る  
あはあはとゆらひでぬたる蝌蚪の紐

# 槐安集

市場基巳

人波を縫ひゆき何となく師走  
見落せしものへ師走の歩を返す  
ろふ梅の一枝ありあふものに挿す  
冬も日の差す街角の散髪屋  
田鴉に朝の寒さの続きけり

水野恒彦

母の木と向き合ふてゐて冬深し  
ふらここや少し瑕ある少年に  
日の量の目に余りたる二月尽  
ふぐり落してめでたさの齡かな  
涅槃西風掬ひし砂子温からず

石脇みはる

囀の室生寺の昼耳痒ゆし  
鳥雲に岬の風のないでをる  
春雨の中の京菜をあがなひし  
冴返る玉菜むらさき色なりし  
手に余りなほ重かりし盤ばん白べい柚ゆ

竹内悦子

石投げし水際におたまじやくしかな  
刃物屋に九官鳥のゐる二月  
初午の背に大瓢ひょう筆の男かな  
竹たけのこ下道みち大亀かみ谷へ抜けて春  
千ち絵えと桃もも龍りゆう神かみさんに福参り



延 広 禎 一

春の瀧行衣たきやういに透ける梵字かな  
錫杖を置くや貽貝の息づかひ  
海鳴りや恋の猫ある鯖大師  
心経の彫られし出刃や水温む  
春慶の硯箱ある雪解かな

中 島 陽 華

切り抜きはクワズイモとや鱭東風  
水晶の光二月の東北弁  
涅槃会の細木に羽毛ついてをり  
陸奥に来てをり二ん月の能舞台  
歯がのうて歯莖つるつる春の闇

栗 栖 恵 通 子

啓蟄や背のファスナーの開いてをる  
春宵の反魂香のけぶりをり  
韃靼に打ち寄すさくら吹雪かな  
抱卵のうすもも色に春の海  
うすざくら土蔵匂ふつくも神

加 藤 み き

春爛漫石塊に水滲みをり  
カメノテに春月あかしあかしかな  
金星の瞬くところ蓬生ふ  
着信音おぼろおぼろの夜なりけり  
天空を往つたり来たり蓬餅

大島翠木

太平洋ずつと手前の大根穴  
閻王の鏡きらりと寒明くる  
雁帰る紅絹の汀の上をか  
風花を来てセザンヌの水浴に  
魚は氷に窓にこめたる夜の霧

雨村敏子

唇に弘法の水春の鴨  
月日貝土佐は南に海展け  
流れ鮑たこにいくつの穴や朝日さす  
人參大根まほらの国の土つけて  
海へ出づる雪解の水となりにけり

黒田咲子

逆打の遍路に猿の群うごく  
雲裳の左右に余寒の避雷針  
土饅頭たむろしてゐて春寒し  
山繭を揺らしにこにこして在す  
結界もものは雨のふきのたう

小形さとる

白粉婆畿内一円しずかなる  
来し方や彼我といふとき冬の虹  
眠りゐて嶽の八万四千偈  
寒蘭のうすくれなぬに私淑せる  
つまむべく四温の風ぎの淡海かな

# 槐市集

秋岡朝子

春泥や門の際まで足の跡  
かたまつて海鼠腹が空いたといふ  
寒けれど窓を開ければ雪の景  
枝ごとの梅のつぼみに雨の玉  
隣人の吾より眠く沈丁花

天野きく江

若菜洗ふ指より奥へ血の巡る  
たぎる湯の音にいつしか名残雪  
むかしあり野遊びと云ふ逢瀬かな  
桜鯛ちよ金魚よ蝨う一粒を付けて来し  
金魚蝨は淡水魚の皮膚に付く寄生虫  
春昼に涸れることなき涙かな

犬塚芳子

風車昼半月の下にあり  
指先にたまる力や春の闇  
笑ひ仏見て囁りの湯につかる  
芽木の山くらくらと沢光りゆく  
臘梅に薄日引き寄せ女かな

岩下芳子

一二輪うかむ梅の湯なりしかな  
カフェインの五体に残る臘月  
みちのくやぼたぼたとのし春の音  
水音の好日好夜春隣  
余寒なほマーガレットを羽織りけり



# 槐集

## 高橋将夫選

浅春の岩根深し波けむり  
枚方

中野 京子

巻き戻る撥条なりしさくら貝

初ひばり金の名乗りを上げにけり  
岡崎

岡崎

近藤 喜子

冴返り野菜の花の日色かな  
蝶々の吹かるるゆくへ鏡文字

強東風や押されゆく身は帆船に  
亀鳴くや真つ直ぐ線の引けずして

吹けば飛ぶ種を蒔きたり大夕日

烏貝宇宙の闇を曳き寄せて

白黒と鳴きぬる鴉余寒かな  
安城

天野きく江

大絵馬や山の靈氣と春の水  
枚方

谷村 幸子

臘梅を辰巳に活けて涅槃かな

野遊びにぎざぎざの無き葉を探す

正面に孔雀明王こぶし咲く  
さみどりの刺身若布と白磁皿

古々と梅ひらく日の覚悟かな

つちふるや松脂幹にからびぬて

あをき血も生命のあかし黄砂降る

涅槃西風亀石水をふきあげる

春めくや二ヶの翼に煽られて  
岡崎

岩月優美子

太陽の塔はるかなり雲雀東風  
心にも力ありけり春立つ日

近藤きくえ

早春の海ガムランの響きなり

クリムトの衣を広げし春の海

魚は氷に上りてヨハンシュトラウス

冴返る夜空一枚生半ば

遠山に未完なりける春の虹  
モーツアルトの曲流れをり芹洗ふ  
春光の白雲木とロダン像

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

吹けば飛ぶ種を蒔きたり大夕日 中野 京子  
この句を見て、ミレーの「晩鐘」が脳裡に浮かんだ。その絵は種を蒔いていないし、大きな夕日もないのに、思い浮かんだのは、「落穂拾い」と「種まく人」からの連想だろうか。いや、夕べの鐘に祈りをささげる農夫の敬虔な姿に、「吹けば飛ぶ種」に込められた命への思いが重なったからだと思う。

白黒と鳴きぬる 鴉余寒かな 天野きく江  
鴉が鳴いている景は余寒を感じさせるに十分。アーとかカーと鳴くのを、白黒と鳴いていると聞いた作者に脱帽。鴉は知恵の回る鳥だという。なんでも白黒をつけたがるのかもしれない。陰陽、明暗いずれもが真実だし、融合や和合だっただけであると思うのだが。

魚は氷に上りてヨハンシュトラウス 岩月優美子  
ヨハン・シュトラウスといえは「美しき青きドナウ」と「ワルツの王」。「魚氷に上る」は「春になり氷に割れ目が生じ、魚がおどり出て氷に上る」という春の季語。ヨハン・シュトラウスの世界に対する思いの全てを作者はその季語に託したわけである。私は氷上のワルツを思い浮かべたのだが……

初ひばり金の名乗りを上げにけり 近藤 喜子  
この春初めてと思われる雲雀が天高く舞い上がって鳴いた。その誇らしげな声は、まるで金の鈴を打ち振るよう聞こえたこ

とだろう。そういえば、トリノオリンピックの最初にして、唯一のメダルは金だった。

大絵馬や山の靈氣と春の水 谷村 幸子  
靈氣ただよう山の社。春の水で身も心も清められる。絵馬に込められたさまざまな願いもきつと成就していることであろう。作者の敬虔な精神の位相が推察されよう。

春光の白雲木とロダン像 近藤きくえ  
春の光の中の白雲木とロダン像。白雲木はエゴノキ科の落葉高木だが、白雲の字面から受けるイメージとプロンズのロダン像との取り合わせが印象的。

坐忘にはなれぬなれぬと雪達磨 西村 純太  
坐忘とは静坐して心をしずめ、自分を取り巻く現前の世界を忘れること（広辞苑）。雪達磨が坐忘になれないのは当たり前で、むしろここでは、雪達磨を想起したこと自体が大事なのである。雪達磨は作者。達磨大師ではないが、手も足も出ないとはこのこと。

砂の女日がな落葉を焚きにける 瀬川 公馨  
女が日がな落葉を焚いているだけの景。しかし、一句の世界ははてしなく広がる。「砂の女」はメタファー。「砂の女」といえば安部公房の小説を思う人が多いかもしれないが、私は「鉄の女」サッチャーの対極にある女性をイメージした。ともかく、日がな一日焚いたのだから、過去はもうすべて煙となって消え去ったと思うのだが、意外とそうでもなさそう……（以下略）